



チューンはそのひとを表わす……!!? だから、流されずに個性を大切に!

■牧原道夫……まきはらみちお

昭和29年生まれ、37歳。鹿児島県出身。大阪府東大阪市にあるショップ“トライアル”や、堺市にあるトライアル南大阪などの代表。18歳で免許をとって以来、乗り継いだクルマはなんと40台という根っからのクルマ好き、チューン好き。パターン化するチューンのなかで、独自のノウハウを生かしたクルマを目指すのだ。

いまから16年前に、この業界に一店員として足を突っ込んだのがきっかけで、いままで生きています。

ボク自身も世間のご多分にもれず、16歳で2輪免許を取り、18歳の誕生日と同時に飛び込みで4輪の免許を取りに行きました。試験3回目にしてようやく合格したのですが、免許を手にするに次ぐ合格しなくなるのがクルマです。

そのころ、欲しくて欲しくてたまらなかったのがサバンナRX-3の赤いやつ。確か新車の価格が78万円だったと思います。ところがそれがなかなか買えないもんで、ほとんど毎日アルバイトし、さらに持っていたホンダCB350を処分して、どうにか35万円になったところでローンを組み、真っ赤なRX-3を手に入れたのです。

納車されたときはうれしくてうれしくて、3日間はクルマの中で寝泊まりした記憶があります。走り始めれば、100が43円の時代に、月々3万円のカソリン代を払っていたから、どれだけクルマオンリーの生活をしていたか……。そして、いままでに乗り継いできたクルマは約40台くらい、一台一台に思い出さずにはいられません。まあそれは機会があったらまた書くことにしましょう。

16年前に、あるカー用品店で働いていたわけですが、そこでメカチューンに関するいろいろなことを勉強しました。そして、チューンブドZなるものをつくりました。当然メカチューンで、いまではノーマルでもでてしまう260km/hくらいの最高速に何度となくチャレンジしたものです。

なぜチューンブドにしたかという点、空気抵抗が、前面投影面積が……というのもあったけど、本音は「低くしたらカッコエエんちゃう」と、単純にそう思ったからそうしたのです。

そして9年前に、いまのトライアルの

前身であるテクニカル・サービス・トライアルを創立し、活動し始めたのです。

いまでもそのスポーツカーと呼ばれるクルマの90%がターボ車ですが、当時は国産車の30%くらいにしかターボは搭載されておらず、毎日模索の繰り返しでした。チューニングを進めていったのです。その成果を確かめる目的で始めたのが最高速トライアル。これはいまでも続けています。

約7年前に、S-130Zで300km/hのカベを破る記録を達成しました。ところがその瞬間、涙が出る……。ってほどの感動はなかったような気がします。なぜなら、そのS-130Zツインターボ仕様を製作するにあたって、約14ヶ月をかけたという自信の裏付けがあったからです。

3カ月はデータ収集と計算に明け暮れ、半年間かけて製作し、あとの3カ月はほとんど毎日実走セッティングでした。結果、確実に300km/hオーバーを自分の体で感じられるようになり、あとはテストのチャンスを持って保管しておいたのです。だから、ボクにとってはその記録は当然だったのです……。

それから何台ものクルマ、S-130数台、旧シルビア、ソアラ、スーブラ……と、最高速テストをしてきていますが……。

と、強気の発言はこれのへんにしまして、テスト車のオーナーの方、関係者の方には、いまでも深く感謝しております。記録は、ひととの出会いによって達成でき、ひととの出会いがあるから、いまもチューニング業界にいらることができ……本当に感謝しています。

さて話は変わりますが、5月号のCARBOYで、「みんな、本当に満足しているのだからか？」と問題提起してあったのが頭に残っています。この問題はとても難しい部分を含んでいて答えは出ないかもしれません。しかし、この業界に携



MICHIO・MAKIYARA

わるものとして、ボクの考えを書いてみたいと思います。

何年か前のノーマル車は、はっきりいって遅かった。パワーだけを考えると、2000ccクラスで400馬力も出ていけば上等で、あの手この手でチューニングしまくることで、280馬力がやっとなるかどうかという状態でした。

ところがいまのノーマル車とくらべて、右を見ても左を見ても、280馬力のクルマがゴロゴロしている。そしてその280馬力マシンはチューニングも、いまではパターン化、システム化がどんどん進み、どれもが味気ないように映えることも、たしかに理解できる。

しかし、一チューニング人としては、人間ひとりひとりが違うように、同じクルマを同じシステムで、同じ馬力にチューニングするにしても、それぞれに味付けを変えているのです。常にジレンマとの戦いを続けながら……。

チューニングとは、おおげさに言えばそのひとの生き方や考え方の表現のひとつ。だから、たとえソーラーカーの時代が来ても……やっぱボクはチューニングをやっているだろうと思います。